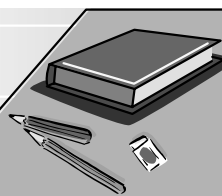


学生時代と図書館 62

— マンチェスター大学の図書館の思い出 —

渋谷 良方



私は、イングランドの北西部の大都市マンチェスターにあるマンチェスター大学（University of Manchester）に留学し、博士号（言語学）を取得した。ここでは、大学付属図書館の思い出を通して、イギリスの大学図書館の紹介としたい。

まず、留学先の大学の背景的素描が必要であろう。マンチェスター大学は、これまでに20人以上のノーベル賞学者を卒業生と教授陣から輩出している高等研究・教育機関としてのイギリスの国立大学である。イギリスでは最大規模の大学であり、5000人の学術・研究スタッフを擁し、3万5千人が学生登録をしている。理系、人文系、生命科学、医学・人間科学等において関連する数え切れない程の学科・コースが用意されている。

大学が提供する数多くの優れた設備（e.g. 劇場、美術館、博物館）の中でも、特に特筆に値すると思われるのが、大学付属図書館である。ウィキペディア（Wikipedia）によると、日本の大学で蔵書数が多いのは、京都大学付属図書館の88.1万冊（全館合計622.8万冊）、東京大学総合図書館の118.5万冊（全館合計849.3万冊）である。しかし、マンチェスター大学の付属図書館は、これらの日本の大学のものとは規模も質も違う。大学のメインの図書館であるJohn Rylands University Libraryのみでも、400万冊以上の蔵書数とイギリス最大の電子資料（4万冊以上の電子ジャーナル、50万冊以上の電子本など）のコレクションを持つ。大学には、このメインの図書館以外にも、10以上の付属図書館があるが、各々の蔵書数を合わせると、つまり「全館合計数」では、蔵書数がケタ外れに多いことが容易に想像できよう。

さて、日本の大学付属図書館には、書庫に多くの本が眠っており、それを探するためには、わざわざ地下に下りていく必要があるものが多いが、マンチェスター大学の図書館では、ほとんどの本がフロアの棚に並べてあるので、検索や閲覧がとても容易であった。貸出形態についても、本の出版年、需要の高さ、保有冊数等の要因に応じて、柔軟に分類されており、数時間から数ヶ月単位での貸出を許可してくれる。電子資料については、インターネットを通じて自宅からでも時間を問わずにアクセスできるようになっており、非常に便利であった。なお、図書館（メイン）は、月曜日から木曜日は朝8時～夜11時半、金曜日は朝8時から夜9時半、土曜日は朝9時から夜9時半、日曜日は正午から夜11時半まで開館しており、試験の時期には、さらに長時間開館され、多くの学生が夜遅くまで真剣に勉強していた姿が印象的である。

図書館のサービスは、資料の閲覧・貸出にとどまらない。インターネットやパソコンなどの設備も充実しているし、大小様々な作業机や勉強部屋が図書館の至る所にバランスよく分散されている。さらに、博士号取得候補者のための特別ナリサーチ・センターがメイン図書館の中にあり、私はそこで自分専用のパソコンと作業机を与えられ、調べものがあればすぐに図書館内でそれにアクセスできるという最高の環境に恵まれた。

最後に、マンチェスター大学の図書館はこのように非常に優れたものであるが、この図書館でもイギリス国内の大学図書館中では3位というのには驚かされる。この事実により、イギリスの大学と日本の大学における、図書館の「レベル」や「位置づけ」の違いを思い知らされる。今後は、教育・研究機関として、日本の大学図書館もより一層レベルアップすることを願う。

しばや よしかた（講師・認知機能主義言語学）